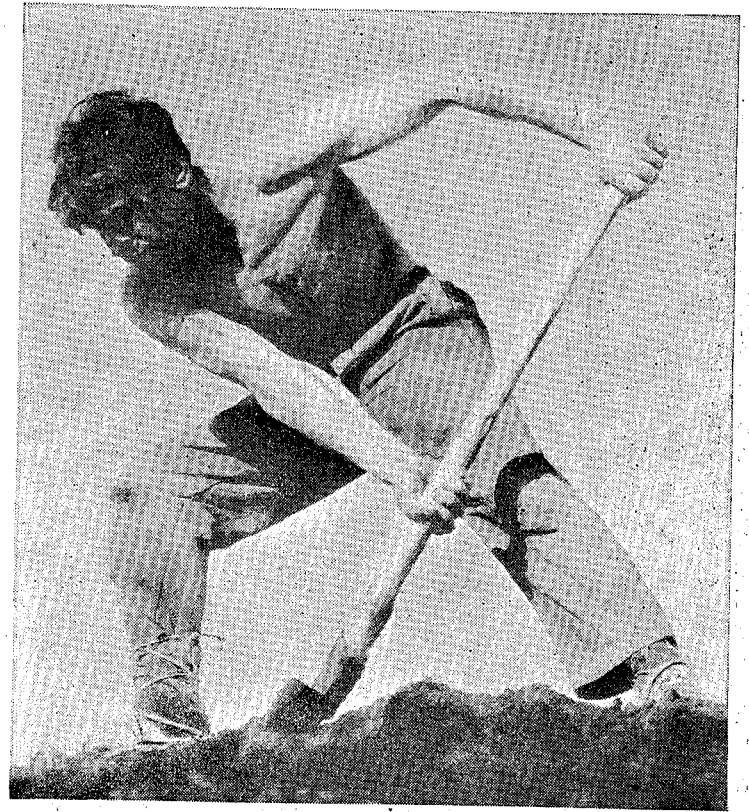


Shinsei

生真



號月九 卷一十第

第三種郵便物認可
昭和七年九月一日發行
行
小冊片二回一日發行
第十一卷第八號

目次

口繪説明 善之進
 眞生の原理と實踐 土屋觀道
 今日—今 中野勉子
 座談會の夕(三) 名古屋支部
 ひかり 山田峰子
 喜びに充ちて 高木齋二
 全國大會報告 記録係
 支那通信及吾朋便り
 全國の同志よ 念
 口繪 神谷善之進



此の繪は人間の心の有様を繪にかき現はしたものです。

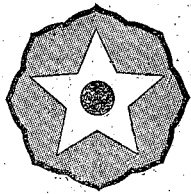
畫の上部中央の目を向き出し、口より火炎を吹き出してゐる恐ろしき鬼の姿は吾々が何かの拍子に、かあつとなつて、恐りの言葉が自分の口から、ほどぼしり出た時のありさまと見て下さい。この恐ろしき焰は二たん口よりほどぼしれば對手を大ひに苦しめ、只そのみでなく其焰は又自分に反轉し來つて自分の顔を焦し自分も苦しむ所の圖です。此の鬼には耳が畫いて無い、これは恐りし時には何ごとも聞く氣にはなれない、——といふ意味です。大きな鬼の顔の右脇の所に異様な鼻と口の一部分が書いて、下方の鬼の脇に手尾の細い腹の大きな怪物が綱を引張つて居るこれは、欲しやほしやの餓鬼の姿です。しらぬふりはして居ても卑しい心の姿は顔に漂うといふ意味です。

右の下端には狐が尾を振り立てる、これは、うそいつわりの心のさまでず。懣心です。これら種々様々の迷へる心が次々へと現はれて來るところの圖である。

右下の大きな足は、自己の本心、佛性——眞實の我——を幾多の遺傳習慣が周圍の諸縁によりて根強く働き自己の矛盾撞著の姿をあらはす。

我等教へを聞かぬ間は眞の我と迷へる我れとの二様の働きが自己自身の内に存在するとは氣はつかぬ。然るに色々教へによりて佛の御心を自分の心に比較して、なるほど、合點(信じて)念佛して愈々其實際を體驗し永遠不滅の眞の我を發見するといふ意味の圖である。(進)

(今の繪の原畫はもつと力強い繪でありましたが寫眞に撮りましたら力の弱いものになりました。



眞生の原理と實踐

土屋觀道

第一 眞生の原理

人として誰か眞實の生活を望まない者がありません。私は主として佛教の眞理に基き天地の大道を喜ぶ一人であるが彼の起信論に因んで、眞生の原理とその實踐とを述べて見たいと思ふ。頌に曰く、「一心二門三大四信五行」。

一に一心

一心とは三界唯一心、心外無別法と云ふに同じ。此の三界は唯だ一心、心の外に別に法なしと讀む。いふ心は天地宇宙の森羅萬象は心を離れて別に存在するものでない。一切は皆心の現はれであると云ふのである。

之は認識論的に於て論究しなければ一寸判明し難いのであるが一切の萬有は人の心を離れては、その存在を知ることが出来ない。認識を外にして萬物の存在はないからである。(これ認識論)。

二に二門

二門とは一に心真如門、二に心生滅門である。之は心真如門とは心性の不滅を云い一心の両面を云つたのである。心生滅門とは心象の生滅を云ふ。此の二者は一者是一心の両面、宇宙本體と現象とに當る。若し水を本體とすれば波は現象である。水と波とは本來不二、水を離れて波なく、波を離れて水なく、水の動きが波を成し、波は水の動く相である。

斯くの如く宇宙の現象は此の一心の活動であり萬象の無常なるは此の活動の相である。(これ本體と現象論)

三に 三大

三大とは體相用の三大を云ふ。宇宙の三方面である。所謂宇宙の生命が體大であり、働きが用大、相大と云ふのはその活動の相である。

此の宇宙は一大生命であつて、無限の時間と空間とに於て、宏大無邊なる大活動を演出してゐる。之を外から見れば物質現象變化、之を内から見れば精神活動の體、相用の二つは此の生命の規はれに過ぎぬ。その本體を本佛、法身とすれば其の相は報身、活動は即ち應身である。三身一如なれば三大また別なものではない。

靜に萬方を眺むれば、萬法各々三大を具す。三大悉く一如一體の現れであれば、萬象の相用また是、本有本佛の現はれである。

四に 四信

四信とは真如と佛、法、僧とである。凡そ人生に於て、此の四信を信するほど大切なものはない。故に、四信と云ふ。

真如は萬法の本源、生命の源、宇宙の體である。或は法性と云い、佛性と云い、極樂と云い、淨土と云ふも皆是同體異名である。真如は萬法を離れず、萬法又真如を離れない。或は佛界と云い、解

脫地と云ふも亦同じである。

佛は覺者、即ち解脫地に到達した人を云ふ。詳に佛陀、佛とはその略である。こゝでは無量壽佛である。之を分つて本佛と迹佛とする。或は本覺の始である。宇宙生命の人格顯現である。一國の君主の如く、宇宙の獨尊として、萬法の統攝歸趣の中心である。現身釋迦牟尼佛は此の御佛の現はれである。淨土教では阿彌陀佛、真言宗では大日如來、天台、日蓮では本門の釋迦、孔子教では天、クリスト教ではゴットに當る。神道では天照皇太神である。

法は念佛、佛陀への合掌歸命の法である。此の時、佛凡一體、神人合一、正に淨土に生るの道理が成り立つ。日蓮の題目、眞言の加持、クリストの祚り、禪宗の坐禪、一として此の法でないものはない。僧は此の法の同志、佛弟子教團である。詳には僧伽

第二實 踐 門

五に 五行

五行とは、信・進・念・定・慧の五行を云ふ。正に四信體現への實踐門である。

信は信心、正に以上の四信を信するものである。信を分つて、仰信、解信、証信の三つとする。信の體現は、正に証信である。仰解の二信は、その過程にすぎない。

進は精進、佛道修行への努力である。何れの處にか修行なくして成佛があり得やう。精進は正に理想實現への努力である。身命を屠しての道を求むる心である。

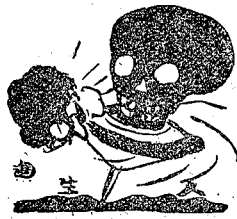
念は念佛、み佛に對する歸命である。又合掌といつてもよい。淨土宗で云へば稱名、日蓮で云へば題目、眞言で云へば加持、禪宗で云へば坐禪、孔子教、クリスト教で云へば祚りに當る。

定とは禪定、三昧のことである。專心念佛になり切ること。三昧成就すれば即ち往生である。往生

は即成佛である。

慧とは智慧、こゝでは所謂佛智を指す。三昧を成すれば即ち佛智が現はれる。雲晴れて月出づるが如し、である。

其時即ち涅槃を成ずる。人生の理想地即ち菩提涅槃の生活である。(九三、八、三) 未定稿澁にて



今日—今

中野 尅子

▽先きの爲めといふことは要らぬ事です。

▽たとへ勉強することだらうが、貯金することだらうが、念佛することだらうが、先きの爲だナント思つてしたら、悉く間違ひです。

▽「信仰」といふことは、徹底的現實主義です。而し享樂主義や、利那主義ではありません。現實完成主義で、その意味から云や理想主義なんです。而し理想主義と云つても單未來主義や、空想主義、浪漫主義ではありません。だから理想的現實主義で、體驗主義、實證主義とも謂つた方がいゝかも知れません。

▽まあ、そんな稱號や商標はどうでもいい、實質として「努力」を先きへ延ばさぬといふことです。「餘力」を存するなと云ふことは、スポーツでも八釜しい事だが、それは肉體的スポーツで云ふことで、精神的スポーツとしての「信仰」では、常にあるだけの力を出し切つて行くことであります。少しも力惜みなく、全緊張、全努力を傾倒することです。肉體的力や、物質的金錢力には限りがあるから、その場合々々で調節が必要だが、精神的力としての「信仰力」

には限りがなく、出せば出す程、後が出て来る。勢づけば勢づく程、ますます勢づいて破天荒の仕事をやつてのけて行く、全く不思議で、これだけは常識外です。だから不可思議、不可稱、不可説で、物質經濟原理を超越した眞理です。だから儉約せぬところに儉約する以上のものを残す。いやそれどころでなく無限のモノを産み出して行かうとするのです。

▽まあ普通の千圓貯金や、一萬圓貯金だと、天引貯金で毎月二十圓づゝ貯金するとか、或は「喰つたつもり」「飲んだつもり」「怪我したつもり」で毎月四圓づゝ貯金「つもり貯金」などをします。これは老後の爲とか子女の教育費の爲めなどとかです。けれ共貯金して居りながらも、常に心の内はひもじい乞食のような、せつなさばかり続きます。だから顔は福々して行きませぬ、ますゝ貧相になつて行きます。たゞ貯金帳に金額の殖えるのだけを見て、心秘かに自分を慰めてゐるだけです。

▽而し本當の貯金の仕方はそいふもンぢやないでせう。一錢でも無駄なものは無駄だから費はぬ、それで残つて行く、残して行く。而し費ふ道へは先きの豫備の爲めだナンかと思はずに、精一杯張り込んで使ふ。だから急所へ肥が利いたように、よく効果を現はして、却つてケチケチと小溜めしてゐたより利益を産む。だから先きの爲めに今を殺すよりも、今の正しき道の爲めに全力を賭するのが、本當の將來をも救ひ、共に助かり、共に浮ぶ、喜びになるのではないでせうか。これが私の信仰的貯金の仕方であります。

▽そりや斯く定石通り、十が十、いつも結果が來るとは云ひません。局部々、一部分々の成果に就いてはこれに反したような場合も多いでせう、而し大勢の趨く處は常に此の趣向を以て進みます。

▽以上は貯金の一例に就いて謂つたのですが、念佛に就いても、研究に就いても、此現金主義になつて進むことが信仰であると思ひます。子供は毎日々々伸びて行つて、成年後に伸びる分を、今から儉約して置くなどと云ふ者は一人もありません。

▽「佛法には明日といふこと候はず」と蓮如上人も仰せられてゐます。明日まで生きれるとは思はぬ明日やろうとは思はぬ。今日、今、やらねばならぬ事をやつて行く。今日一日の他に、昨日も明日もない、總てが今の一瞬になつて現はれてゐます。だから「今時」の解決が總ての解決であつて、「今」の努力の他に昨日の悲しみも、明日の患ひもありません。

せん。たゞ今の「今」を如來様のお慈悲によつて活き、如來様のお慈悲に生かして行くことが、最も尊く最も意義あることでありませう。

▽後生も極樂も、現實から遊離して、どこか鼻の先か、十萬億刹土向ふにブラ下つてゐるのでなく、娑婆も極樂も、今世も後世も、此の「仕事」の一發にズドンと打ち出して行くところに、七色の煙花が一度に開く譯です。

▽「信仰」が頭の中の遊戯にならず。活きた人間の正しき活動になつた時。初めて佛も世に出でられたといふものがあります。それまでは佛も極樂に埋葬されてゐたのです。經も石底に彫り込まれてゐたのであります。佛も法も自己の一車一體となつて甦るのでなくては佛を殺し、法を殺してゐるものです。



眞生會座談の夕(三)

題、土屋先生を中心として 名古屋支部

「宗教の實際化について」

時 昭和七年五月二十日 午後七時半より

所 南鍛冶屋町 渡部善兵衛氏宅

司會者 堀 榮 二氏

速記者 丹水生

集會者 會員多數

土屋 「實は私もお袈裟のことを少し話したいと思ひますが……」

司會者 「是非何卒」

土屋

「之は作つてお話しするものではありません。斯う、有つた儘、その儘をズーツとお話して見たいと云ふ氣も致します。それが皆様がどうお感じになるかは又別ですが、私は御承知の通り宗教と云ふものに對して(子供の時代は因縁があつたんですが)、小學校を卒業する前後から、好意が持てなかつた。その關係で坊さんの姿は勿論、お袈裟や衣に對しても、好意を持たなかつた。坊主憎けりや袈裟迄憎いと云ふ諺がありますが、多くの坊さんの生活若しくは坊さんの云はれたこと、さう云ふものに對する反感は聽て坊さんの服装に對しても好意を持つことが出来なくなつた。所が二十歳前後から、宗教に對する一つの憧憬が現はれて、自然宗教信仰を持つた人の、その信仰の内容の尊さ、生活の壯嚴さ、斯う云ふものが自然宗教的偉人の上に、又姿の上にも考へられて來た。殊にお釋迦様が佛としての生活を吾々人類の上に現はされた。そのお釋迦様の宗教或はお釋迦様の宗教的氣分、或はお釋迦様の宗教的生活斯う云ふものに非常に憧憬されて來るやうになりました。さう云ふ佛陀の道を辿る者が、本當の僧侶である。さう云ふ信仰の上に生きてゆく所の、全身を投じた生活が僧侶の生活だ、と云ふことを知つて今度は僧侶の生活が尊くなつて來たのであります。吾々は日常食ふ爲に翻弄されてゐる。或は男女の問題とか、或は經濟の問題、有我的の生活に執はれてゐる。しかるに、正しい意味の僧侶と云ふものは、さう云ふ問題を超越して、全身を眞實の道に献けてゐるものである。さう云ふ人達の着てゐる所の衣、さう云ふ人達のつけてゐる所のものが、即ちお袈裟である。と斯う云ふことが正しい意味に判つて來た時、私が坊さんになりたいと云ふ意味が、自然僧服にまでなつかしみを持つやうになつて來ました。けれ共當時の私は坊さんでないから、坊さんのお袈裟を着ると云ふ氣にはなれなかつた。所が、二十才の春、始めて出家し、得度の式を受けました。その時私は早稲田の大學から巢鴨の宗教大學に移つたのですが、私自身で頭を剃りました。併乍ら親兄弟や凡ゆる方面から、私の出家に對しては反對しました。けれ共、私はその反對を押し切つて、頭を剃つた。恰度その時忘れもせぬが私の友達が一人建築科に入つて居つた、森協と云ふ人でした。それが私が一人で髪を剃るのを手傳つて呉れまふことが非常な一つの喜びでした。それでついでにお前も剃つてやらうかと森協に云つたら、それでは頼まう

かと云ふので、今度は私が刺つてやりました。だが刺るには刺つたが二十何ヶ所と云ふそり傷を付けたことを覺へてをります。

(笑 聲)

これは滑稽な話であります。私はさうして始めて衣とお袈裟とお珠數この三ツを頂いて得度式と申しまして、愈々之から出家になると云ふ式を佛前でやつたのであります。その時「射水」と云つて私の丁度頭の頂天に水をつけて貰ひました。マア、身も心も清め洗ひ落すと云ふ意味であります。愈々その式のある時に、之で自分が身も心も形の上迄、出家をしたのであると云ふ、スツキリした感じが致しました。その時の氣持、本當にお袈裟衣を着けた時、これで出家となつたんだ、從來の在家俗人の生活を捨てて、出家になつたと云ふ氣持をハツキリ感じて、形式の上にも亦これと同時に心の上にも、出家となつたと云ふ氣持になつたのであります。それこそ本當に清い氣持になつたのであります。さうして、もう非常にお珠數が懐しい、ちつとも手を放したくない、法衣もぬぎたくない、お袈裟は無論のことであります。おツムも其後私は自分一人で刺つて居りました。

處が今日の私は御覽の通り總ての形式がなくなつてしまつてゐる。衣と云ふ衣も長いのでなく改良服一つになつてゐる。普通は洋服にさへなつてをります。之は

私の考へが人間本位の宗教として、できる事なら僧服のすべてをさへ不用と思ふやうになつて來たからであります。此の意味から僧服と云ふやうな姿は今や懐しいと云ふよりも嫌だと云ふ位になつて居ります。之は大變な變化でありますね。初めの状態とは大きな變化でせう。けれ共初めて私がお袈裟をかけた時の、心の變化した氣持と云ふものは、最前お話ししたやうにたゞ何とも云へぬ結構な氣持ちでありました。ついでですから何故私が僧服を嫌ふやうになつたかをモ一少しお語致しませう。私は出家した當時と云ふものは、總てのものを捨て、只マツに本當に生きる道を求めたのであります。所がその信仰の進むに隨つて、私の心に一ツの變化が起つて來ましたそれは如來様に南無する點ではありません、否その點なら寧ろ今日の方が昔より一層強く深くその必要も感じてをります。けれ共、それがあると同時に、今迄に豫期してゐなかつた一ツの大きなものが現はれて來たのであります。それは何んであるかと云ふと、今後の宗教と云ふものは出家の宗教ではいかん、即ち在家の宗教でなければならぬ。モ一ツ云へ換へれば、坊さんと云ふやうな特種の生活や形式の宗教でなく、妻あり子ある在家の生活、或は金を儲ける、損もする、凡有る人類は佛を中心として本當に生きて行くのが本當である。今日は僧侶と云ふやうな特種的な生活をするのではない、一刻も早く、深く信仰に達するもの、それはモ一ツ現實に現はれて來なければならぬと云ふ事でありました。自分達が洋服を着て僧服を着けぬと云ふことが、如何に現實の宗教に關係あるかと云ふ事は、どうも僧服を着ると、あの人は坊さんである、吾々は在家である、と云ふ考へが、説く人と聽く人との間に、生活の一致を缺ぐものを來たすからであります。之は宗教を出家と在家とによつて區別せんとする間違つた考へであります。私は初め出家の當時は五年も十年も、チャンと僧服を着る。袴をつける。人が居ないでも胡坐をかゝない、即ち他に恥ぢないと云ふ心持。自ら批判して恥ぢざる態度を、と到らぬ乍らも、とつて來たのであります。處が私の考へは信仰の進むにつけて、一大變化をいたしたのでした。人としての行爲は他人の生活に邪魔にならぬ程度ならば、ザツクバラに寛いだ生活が本當である。假にザツクバラに打とけてゐても、本當に道を求める人ならば、話してゐる相手もさうであるとして、信仰の中に佛陀の生活に進んで行く、それが本當でないかと思ふのであります。即ち在家の宗教を私は實現したいと云ふ氣になつたのであります。

そこで永年やつて來た今迄の生活容式を捨て、己むを得ない場合の外は、成可く僧服を着けないことにしたのであります。又長い法衣は一枚も無い、私が今迄と變つて來たと云ふことを、さう云ふ意味に於て理解して頂きたいと思ひます。(以下次號)

ひかり

東京 山田峰子

○み佛の光をあみて行く道に筆跡しるき道しるべ見る。
○南無阿彌陀佛唱へてすゝむ此道は心安らに歩きよろし
も。

○御佛に朝をさゝけし燈は小さけれども光に充ちぬ。

○漸くに胸に光のあからみてよみかへりける吾心はも。

「喜びに充ちて」

高木 齊 二

かつてない生命の躍動を感じる。

元氣一杯です。全力主義です。

絶大な靈光を被り、抑へ難い歡喜の心を、抱いて人生の途上にある、僕は、日一日と樂しみ急ぎつゝある。あゝ!! 入信以前の過古を顧みる時、實に感慨無量なるものがある。

曾ては人を呪ひ、神を呪ひつゝ居た私が、どうしてこんなに生きたる喜びを感じる事が、出来たでせう。

僕は生れて以來何んぞ云ふ、我見我執を通してきたのだ。

人情の離反・讀書・空想・病疾等次からへ起る事件は僕の未來を眞暗にしてみました。

悶へ、苦しみ不安でくゞ堪らない生活を、幾年か送りつゝ居た僕は何んぞ云ふ、生きくゞと朗らかな氣持になつたのだらう。!! 僕の魂は僕の魂は! あゝ絶對な!! 彌陀の靈光に浴したのです。絶對の慈悲に照されたのです。この信仰の力によりて、永遠の生命を信じたのです。

初めて萬物を平等に照らす太陽の御光に合掌する事が出来た。

夜、仰き見る神祕な月も初めて僕を、笑つて、むかへてくれた。

此の力で社界を眺めたとき、おゝ!! 何んぞ云ふ醜い事柄の多

く、暴露されることか。

僕は祖國日本にどうしても禮贊の言葉を送る事が出来ないのだ。私は多くを云はぬ。

心の理性を失つた、人々の不健全な社界相・物質的欲望の享樂生活、いたづらに、末梢神經のみ過敏に發達して心は昏睡状態に陥つてゐるのだ。

わづかな利の前には十年の知己も忽ち怨敵となり、紳士忽ち黄金の前には奴隸となり、嗚々!! 徒らに、外形にのみ走つて崇高な精神の修養をわすれた人の氣の毒なことよ………

何故我等が持つべき、眞情を失つたのだ。

ない。

我々は精神の健全を保持する爲に一日も修養を怠つてはならない。

古來聖者さよばれる人達も、結局此の道を、叫びつゞけたのだ。釋迦は外道の若行主義即ち禁欲生活を排斥すると同時に、

又他の享樂主義をも否定して、眞の人間生活の理想は苦樂を超越した……中道の生活にあると、主張されたのだ。

皮相な物質生活を離れた、久遠の道、永遠の生命には不滅な喜びが溢れてゐるのだ。

この不安と、享樂に送る世に我等が、同志は、ばつきりと、

目標を定め、國民的努力をなし、生活打開の新運動を起さればならない。

幸なる哉、無限なる宗教の力を信する我等が同志よ我等は我

等の旗印を天高く懸けて、眞生行の大運動に旅立たんぞ。時來りて、潮は満ちぬ。

行け!! 進め!! 行きて、世界文化に大貢獻なしてん。(終り)

唐澤全國大會の報告

大飛躍を期して

社會は益々困亂し、國民は生活の不安に戦いてゐる。

濁流に溺れんとするものを見る時、我々はたゞへ力足らずと雖もその救助に全力を爲すべきであらう。

國家多難の際、志ある青年の立つべきときである。立たねばならぬときである。

我等の眞生同盟は、この大飛躍をなさんとして、着々準備と計畫をすすめて来た。春の行基寺の大會のあきまうけて、七月唐澤の全國大會に於ても、この問題に主力を注いだのであつた。

支部代表の協議會

廿四日の朝、私は上諏訪驛に下りた。

なつかしの唐澤山に登り、殊に輝くが如き土屋先生のお顔を拜した時は全く有り難かつた。全國から集つて下さつた同志の顔も希望にかまやいてゐた。

その日全國支部の代表達は別室に集合して會議を開かれた。前大會に引き續き淺野氏の司會によつて、先づ大會の方針を決定し、引き續いて同盟規約の協議にうつる。行基寺の大會に於て草案されたものを基礎として協議を進行した。

續いて廿五日、晩の總會までにはセロ此の協議を終了せねばならなかつた。私は共は休憩の時間は勿論、念佛等の時間さへも殆んどこれに當てればならなかつた。

同盟規約の決議

かくて午後七時四十分、全員集合して總會が開かれた。淺野氏病氣の爲、片岡氏代つて議長席につき、同盟規約につき

本日に至るまでの經過を報告され、續いて練りに練つた規約原案を更に逐條審議した。土屋先生も同盟の一員なられて私共と共に此の協議に参加せられた。其後數多の同志によつて熱心に眞剣に論議されつゝ、幾多の修正を行はれつゝ、遂に全文の決議を得た。

この規約を基礎として、本同盟の今後の活躍こそは多大の期待を持ち得るであらう。

猶も幹部は協議を擲けた

この眞生主義を如何に宣傳し、如何に實踐すべきかの實行方法協議の爲幹部は更に會合を經續した。東京の神谷、柏崎の原、渡邊、名古屋の尾上、津島の中野、岐阜の古賀、大垣の淺野、大阪の會我尾、堺の南、吳の片岡の諸氏である。

總理の推薦

廿六日の夜七時、總會は再び開かれ

總理の推薦

11

た。議長淺野氏先づ同盟發展の由來を述べ、更に今後の發展につき同志の建議と提案を希望される。

中野先生先づ發言を求められ、發展策協議に先立ちて、昨夜の總會に於て決議された規約に基きて總理の推戴を行ひたいと提案され一同盛んなる拍手を以て賛意を表し、土屋先生を總理に推戴せんことを満場一致決議し議長淺野氏より改めてその旨を土屋先生に告ぐれば、先生は靜かに然も莊重に口を開かれた。

總理の言葉

「自分は自ら眞理とするものに従ふのみであつて、決して總理するものではないと思つてゐる。」

キリストが「我は靴の紐をも結ぶものである。」といつた言葉を私は此頃ハツキリと感ずるものである。決して皆様の指導しようといふものではなく、皆様と一緒に行かうと希つて居るものである。

隨つて總理といふ言葉が私の生活にふさわしくないものである。もつと平民的な言葉が、一會員として皆様と一緒に行かうとするものである意味を表現する適當

な言葉があれば變へて頂きたいと思ふものである。

眞生主義は單なる私の主張ではない。土屋の信じて自らその道に動かうとするものに他ならぬのである。従つて總理の言葉にさらわれず、今日までの如く極く内輪に、平民的に扱つて頂きたいことを希望し、總理は上に立つものでなく、皆様の小使のつもりで、先き馳けの旗持ちの意味で御引受けしたい。」

と述べらるれば満場肅として聲もなかつた。

同志の反省

提案者中野先生は再び立たれて、土屋先生が總理を御引受け下さつた事に對して感謝の意を表され、且つ目出度く總理の推戴をなした事を一同と共に喜び、一段と聲をばり上げて

「推戴者として反省し、一同も亦反省すべき事は、土屋先生を以て單なる個人的土屋先生といふものでなく、我等の總理として推戴したる所以は、今日迄の如く、單なる土屋先生の眞生運動としてなく、我等の眞生運動なりとの意味を力

強く表現したものである。

今後はどうか團體として、協同した力の働きとして力ある運動をして行きたいと述べられた。

發展策に就て

續いて運動の方法其他發展策について協議した。同盟の前途をおもひ時間をも忘れて非常に熱心に提議し、或は協議して頂いた事は全く尊いものであつた。

此の意氣はこの熱さを以て我々は今後の運動に臨まう。

神谷氏の宣誓

十時を過ぎる頃、協議はやうやく終り、希望に輝く同志は「高根に薫る」を合唱して會を閉ぢんとした。その時神谷氏は悲壯な面持ちで立ち上られた。その眞剣な態度に私は胸を打たれた。氏はおもむろに口を開いて

「いよく先生を中心とする眞生同盟は大飛躍をせんとして居ります。此處に於て私は慚死すべき此身此意さすべてを擧げて此眞生運動の爲に盡したい覺悟です。私は指を切つて何か書き残して置きたい。そうして私の決心の永久に變ら

ぬ事を誓ひたい。」

お、そのさげび!

その炎々として燃え上る熱!

私はその時満場の同志がどんなであつたかを知らなかつた。私は記録係である事をすつかり忘れてゐたんです。只その叫びは私の胸を打ちふるわせた。私は泣いた。實は私自身にもその罪を感じしきりに慚愧してみたのです。私はぢつとして居れなかつた。續いて淺野氏が何かを語つて居られたが、もう私の耳には入らなかつた。恐らくは氏も亦神谷氏の如く尊き誓ひを叫びられたのであらう。私はその終るのを待つて、感激に充ちて立つた。

私の願ひ

「私は入信既に六年、然し尙未だ迷える年です。けれどもどうかして此の眞生運動の爲には、身も、心も、財産も、否一切を擧げて盡したい願ひに燃えて居ります。否キツト盡します。盡されば成しません。たゞへ人から笑はれやうと、それられやうとそんな事は問題ではない。必ずや此道に立ち、此道に死ぬ決心です。」

この決心を私は皆様の前にて如來様に誓ひます。」

私はさうして座を立つた。その後がどんなだつたか知りません。私の乗らねばならぬ汽車の時間が迫つてゐたのです。名残りの鐘を撞く暇さへなく、馳けるやうにして山を下る頃、オホモクの響が闇を縫つて聞えて来る。お、それは、同志が感激に充ち、此眞生の大業に身命を捧げんとの誓ひを念佛して居られたのであらう。

——昭七、八、十六——
(記録係)

日華周遊紀念

土屋氏に 神谷 善之進

永遠の法の友とは知らざりき
去年の今日舟に見し君

返 歌 土屋 修

周遊の浮れば去年につきざりき
法の彼岸に向ふ乗合

眞生同盟規約

- (名 稱)
- 第一條 本同盟ヲ眞生同盟ト稱ス
- (目 的)
- 第二條 本同盟ハ眞生主義ノモトニ各自ノ向上、社會ノ改善ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- (事 業)
- 第三條 本同盟ノ目的ヲ達成スル爲メニ左ノ事業ヲ行フ
 - 一、眞生講演會並ニ眞生修養會ヲ開ク
 - 二、社會改善事業ヲ行フ
 - 三、文書ヲ刊行ス
 - (組 織)
 - 第四條 本同盟ノ主旨ニ賛シテ入會セルモノヲ會員トス
 - 第五條 各地ニ支部ヲ置ク
 - (經 費)
 - 第六條 本同盟ノ經費ハ各支部ノ釀出及寄附ニ依ツテ之ヲ支辨ス
 - (會 計)

第七條 收入決算ハ毎年一回總會ニ報告

シ其ノ承認ヲ得ルモノトス

(役員)

第八條 本同盟ノ事務ヲ處理スル爲メニ
左ノ役員ヲ置ク

總理 一名、顧問 若干名、

主事 一名、幹事 若干名、

常任幹事 若干名、

但シ任期ハ各三ヶ年トシ再選テ妨グ

ズ

若シ主事ニ缺員ヲ生ジタル場合ハ幹

事會ニ於テ、幹事ニ缺員ヲ生ジタル

場合ハ當該支部ニ於テ、常任幹事ニ

缺員ヲ生ジタル場合ハ總理ニ於テ補

缺推薦スルモノトス

第九條 總理ハ總會ニ於テ推戴シ本同盟
ヲ代表シ一切ノ會務ヲ總理スルモノ
トス

第十條 顧問ハ總理コレヲ推薦ス

第十一條 主事ハ幹事會ニ於テ推薦シ總

理ノ命ニ依リ會務ヲ處理スルモノト

ス

第十二條 幹事ハ支部ヨリ各一名ヲ選出

シ一般會務ノ相談ニ應ズルモノトス

但シ選出スヘキ幹事ノ數ハ支部ノ情

況ニ依リ總理ニ於テコレヲ増減スル

コトヲ得ルモノトス

第十三條 常任幹事ハ幹事會ニ於テ推薦

シ各部門ヲ擔任スルモノトス

(部門)

第十四條 本同盟ニ左ノ部門ヲ置ク

一、教學部 二、社會部

三、宣傳部 四、財務部

五、研究部 六、出版部

七、體育部 八、音樂部

九、情報部

(總會)

第十五條 總會ハ毎年一回開催シ會務ノ

報告ヲナシ併セテ諸般ノ協議ヲ行フ

但シ必要ニ應ジテ臨時總會ヲ開コト

ヲ得

(大會)

第十六條 毎年三回以上大會ヲ行フ

(事務所)

第十七條 本同盟ノ事務所ハ東京眞生社

内ニ置ク

(附則)

第十八條 規約ノ變更ハ總會ニ於テ協議

決定ス
昭和七年七月
眞生同盟
以上

決議事項其他

(出版物の件) 土屋先生の著述「人生と宗教」に就て、多數の豫約申込みを受けて居たが、出版が非常におくれてある事を責任者よりおわび申上げる。

先生が非常にお忙であつたので、八月中には傳道をお休み願つて脱稿を急いで頂き九月中旬に印刷製本し、十月には必ず出版の豫定である。今しばらく御猶豫を願ひます。

(眞生誌に就て) 雑誌「眞生」は現在までは土屋先生の個人出版であつて、毎年幾分の欠損しつゝ、繰繰して來られたのであるが、今後は經營編輯の一切を同盟に於て行ふこと。

東京に主事を置きて編輯にあたらしめること。

内容を改善し、漸次頁數も増大すること。

(本部設立の件) 東京に本部を置き、専任主事を置きて、各地支部との聯絡を計り、統制を行ひ、運動の能率を増進すること。

(總理の敬稱) 現在までは「お上人」と御呼びしてゐたが、氣分を一新する上からも、今後は「先生」と改むること。

(總理の傳道方法に就て) 従來は一定の地(毎月一回一日宛御巡錫せられる例であつたが、今後は年二三回宛とし、一回を二三日宛連續して講演會或は修養會を行ふこと。

新らしき地方に進出して、支部の増加を計ること。讀書及著述の時間をつくられたこと。

(修養會) 唐澤、行基寺等の修養會は期間を五日間に短縮すること。

「お別時」といふ言葉を止めて「眞生修養會」といふ細有名詞を用ふること。

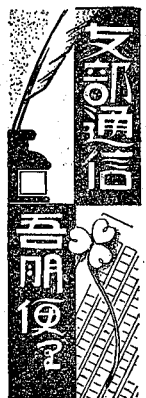
全國大會には各支部から一名は必ず出席の出來得るやう努力されたこと。

體操、唱歌等に就ては係を決定し、専門的に研究せしめること。

(同盟旗作成) 同盟旗を作製すること。

(支部間の協力) 最寄りの支部間に於ては互ひに聯絡を計り、協力して運動の効果を増進するやう努力すること。

(寄附金募集) 本部設立及同盟旗作成等の爲寄附金を募集すること。



名古屋支部

崇徳寺講演會

七月廿日午後二時開會百度以上の記録的なる灼熱にも不拘、百名を超える盛會、會員高島氏の五分間演説、女子會員、飛入演説あり非常なる活氣を呈して來た事は喜ばしき事である土屋先生の「宗教と道徳」と題して約一時半の大雄辨があつた、論者は實に整然として會員一同は愉快に聴講した。

中野先生指導の眞生行進曲の合唱、新曲「裸に歸れ」の合唱は確に清涼劑であつた。

堀先生の人事問題として最近宗教の傾向等宗教即生活を痛切に直感せしめ、午後五時三十分解散

タイピスト學校内座談會
七月廿日午後八時開會「釋尊は再生するか」

指導土屋先生司會堀榮二氏
百々氏曰く 釋尊は現に茲に出現して居られます姓名は改めて申上ません拍手盛んに起る。

尾上銀子女史曰く 釋尊は再生す、宗教心なき者は憐れである合掌の生活に入つて始めて強く生きる事が出來ます自己の入信懷舊談を趣味深く話された。

西脇さん曰く 釋尊は勿論再生しますと述べ、自己入信當時の歡喜の状態を述べられた。

中野先生曰く 停車場昇降口、辻々に宗教的警告を書いて始めて自信力を強めました、司會者曰く中野先生の妙句は確に意味深重です。

渡部支部長曰く 釋尊は再生せられるであらう釋尊は入滅せりと雖も不死身の御體ゆへ隨時出現すこと述べて着席

司會者餘り釋尊出現説のみ多いが變つた反對論はありませんか。高島さん 餘り一方に偏して居る様ですから反對の立場から論じます。眞實の道をお説く人あらば即ち釋尊ですから再生せずとも自ら釋尊になればよいので必要のなき世界に大釋尊聖者は再生する必要がない。

堀司會者 話は兩端を承るご明瞭になりませす私ば十年後に樂な身體となり印度ペルシヤ地方の教育も宗教も比較的低き地に到り其地主民を非常に愛し拾年一日の如く暮せば土民の信用も博し、釋尊の如く敬慕せらるゝ事はそれほど六づかしくなれり事でしょう拍手盛んに起る。

渡部支部會長 靜に立つて堀先生が拾年後彼の地に滲られ佛敎御布敎の節は私も參上して御盛況を拜しますと述べられた……一座の人々泡を吹き出して洪笑した……愉快なる劇的シーンであつた其他數名の出現説がありました。最後に

土屋先生 言葉靜に釋尊は何度も再生せられて居る善導大師も御釋迦様の再來である法然上人は勢至菩薩の再來さ昔から

云ふて居ります眞實に活きる道をお説く人あらば即ち釋尊ご同體である誰れでも善を少しでもなし眞生の意義を實現し生活に織込んで行けば釋尊は御心の中に産れて来る法華經の中にも我常に此地に既服すさある皆さん佛の生活を自己に出現せよと結ばれた。

一同合掌

九月座談會 期日 九月二十一日
所名古屋市東區車道町宗受院
話題『地獄極樂を誰れが見る』

岐阜支部
當岐阜支部役員は八月十八日晚本誓寺に於て役員會を開き左の通り決定致しました。

役員

支部長 白旗靈光

主事 松浦重三(補助員太田悅次郎)

幹事 古賀清一郎、伊藤 花子、

片桐 照子、河瀬喜和子、

伊藤かれ子、

當支部より選出の幹事は古賀清一郎

來月十二日土屋先生の御巡演を願ひ當支部の總會を催し同盟運動の發展策を講ず

る答。

本月號の眞生は眞に、うぶな、そして何處さなくさばりとして肩の凝らない若々しき魂の躍動して同盟の統一したる魂の焦點がはつきり我々に嚮ふ所を指示してくれる様な嬉しい懐かしい氣持が湧き出します、しつかり生長させ、思ふ存分其光を力を発輝させ吾々の本願を達成しなければならぬ感じが強く致します矢張り「我がものと思へば輕しかさの雪」さても申しますか手に取りて裏と表と何邊も繰り返し色々工風を致したい氣持に充たされます。

以下略

大阪支部

前略……八月十六日豊田氏方にて同盟委員會を開きまして、本部の規約によりまして左の四名を本部の幹事に推薦することにいたしましたから宜しく御承知願ひます。

曾我尾昌治 米田 傳司

南 一男 豊田 會三

愛知縣譽母支部

(前略)當支部情報は勝手乍ら來月號にお

延して下さい。又同友の感想文に付ては同友の方々へお願ひ申しました。

二伸 本月の當支部としての第一着手事業は、モスにて眞生同盟コロモ支部旗を作りしました。別染にて金貳圓五十錢(旗のみ)

今月は原稿豊富の爲長圓寺様の「古今十方の衆生より」土屋修氏の「お別事飯後感」大石支部通信「其等止なく次號に割愛いたしました。不惡(編輯係)

□ 濫にて 土屋觀道先生より

私は去る九日から當地温泉寺にまゐつて居ります。幸に無事、毎日慈光裡中に原稿の整理に没頭して居ります。今月ばかりは全く一人で思ふ存分の勉強ができました。乍他事御安神下さい。八月の末か九月の初旬に歸京の豫定です。

□ 眞生誌も愈々八月號から、眞生本部の方へ移りました。之からは表裏共に皆さまのものとされたのです。どうか此の獨り子をお互によく育て上げようではありませんか。八月號は同志の努力で全く近年にない出来はへです。皆様も證め

て下さいよ。

八月二十二日

以上

□ 甲野善英様より

努力さへすりや四十尺の地の底からでも水が上がる。樂して寝ころんで居ては噴水の下にゐても水は口へ這入らぬ。汲むことです、堀る事です。

坂井さんや、谷口さん達が直接雜誌の御世話をして下さるそうで力がましく感じました。

どうぞ、あなた方や皆さん、頭になる人や、手になる人や、足になる人になり合つてどうか御努力をお願ひいたします口でだけ言つてゐるのでなく一つ位は人もビツクリするような骨折りの後を實現したいものです。(以下略)

誌代拂込者御芳名

- 五十錢 靜岡 龜田 彌生様
- 壹圓 四日市 山里 秀 隨様
- 貳圓 三重 中川 茂市様

編輯員より

吾々の雜誌としての最初の八月號は編輯員一同大いに努力したつもりでありましたが何分經驗の無い者ばかりでまだ理想的さは云へませんでした。號を追ふにつれてますます、雜誌にしたい編輯員一同熱心に考究して居ります。先月號の表紙の繪も吾々素人が製版から印刷まで手刷の機械で徹宵してやりました。インキのきかなかつたのやら、随分不出來なのがありました、お赦して下さい。

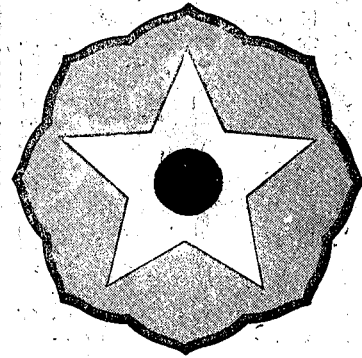
今月號から發行日を二日ご改めましたから御投稿は毎月廿日を以て締切りますから御承知願ひます。御投稿は可成原稿用紙を用ひて下さい。

御投稿は「眞生原稿」と朱書なるべく

東京市橋京區入舟町二ノ三ノ一

お送り願ひます。 谷口 盧 空宛

Shinsei



□昔の諺に「日暮れてみち遠し」と云ふことがあります、私達の人生も
 うっかりすると此の悔いがなにも限りません。
 □かつて、辨榮上人が私に申されたことがある。「光明主義の運動も之か
 らだと思つてやつたが、あとで見ると己に十年も遅かつた」と。今から
 思ふとそれが私への策勵でありました、私達の運動もうつかりすると遅
 れます。
 □「光陰矢の如し」と古人も云つたが暮れた人生ほど速いものはない。
 今年もあと三ヶ月となりました。私達は果して今までに何をしました
 か。人生の一生は恰も、ロウソクに火のともつたやうな人生です早く立
 たぬと遅くなる。
 □願はくは全國の同志よ。一刻も早く吾々はお互に提携して立ちませう
 身命を賭すれば何事かならざらん。一切は實行の世界であります。實行
 なき所に本當の成功はない。それはたゞ引づられたる生活であるからで
 あります。
 □昔から今日まで多くの歴史をひもどきますと良かれあしかれすべての
 歴史は一として此の努力からされぬものはありません。やつても死
 に、やらんでも死ぬ人生であります。何れ死ぬものならば本當の事を仕
 やうではありませんか。
 □金と名譽と色慾と食ふことの外に望みのない人ほど仕やうのない人
 はありません。願くは如來を中心とする眞人の同志が欲しいものです。
 □願はくは全國の同志よ！ 共に價値ある生活に立たうではありません
 か。それには何よりも各自が人生の意義に目醒めて活動の實踐に移るこ
 とであります。(念)

發行所

眞生社

東京芝公園四十號九番地
 振替東京四七二八八番

東京市芝公園十四號地九番
 發行兼編輯人 土屋 觀道

東京市外濠谷町中通二ノ四二
 印刷所 印刷人

副編輯 丹丘舎
 印刷所 夫
 電話 青山七五二番

本誌定價 一部 十錢(郵税共)

半年 六十錢(同)
 一年 一圓(同)